

「20000ヘルツ」

登場人物

律子  
先生  
ユミ

作

サカイリユリカ

閑散とした、殺風景な部屋。  
白い壁が取り囲むその小部屋には、アップライト型の黒いピアノが一台。そして、手前には背もたれのない四角いイスが置かれている。  
ピアノの蓋は空いており、五線譜だけが描かれた楽譜が、開かれている。  
うなだれた中年の女性が手前のイスに腰掛けてピアノと対峙している。

律子　こんなに、空っぽになるだなんてね  
．．．

一本の指が、ミ、ソ、ラ、と探るように鍵盤を叩く。

律子　私は、どうしたら、良かったのよ

「レ」の音の鍵盤を、音を確かめるように何度か叩く。

律子　ねえ、ねえ、

一本の指が、ド、ソシラ、と探るように鍵盤を叩く。

律子　また、ひとりになっちゃったのね．．．律子．．．

両手の指が、ピアノの鍵盤をなぞる。

律子　あなたはいつだって、私を慰めてくれた。  
なのに今は、

突如、沈黙を破るかのように、女性は両腕を振り上げ、握りこぶしを鍵盤の上に強く振り下ろす。「ジャン」という不協和音。

律子　．．．あなたの声が聴きたい。  
会えるのなら、もう1度会いたい．．．  
．．．わたし．．．  
もう1度．．．あなたの心を震えさせることが、  
わたしに出来るのかしら．．．

背の高い男性（先生）が、メトロノームを持って部屋に入ってくる。  
先生はメトロノームをピアノの上に置き、針を動かし始める。  
部屋には乾いたメトロノームの音が響く。

先生　ピアノという楽器は、黒鍵が36、白鍵が52、合わせて88鍵あります。  
それから、下についている3つのペダル、これは右から、ダンパーペダル、マフラーペダル、ソフトペダル。手ばかりで演奏しているのが  
最初は精一杯でしょう  
が、足でも演奏できるようになれば、更に音に深みや伸びが増し、  
表現の幅が広がるというものです。

律子　先生．．．先生にピアノを教わっているころは、まさか自分が教える立場になる  
だなんて、思ってもみませんでした。

先生 …… 律子さん、どうやらあなたは何か疲れているようだ。

少し休憩しましょう。

先生、でも私……

先生、でも私……

ねえ律子さん。知っていますか。  
自然界には1ヘルツから数百万ヘルツまでの音が存在していますが、  
そのなかで人間は20ヘルツから20000ヘルツまでの限られた振動しか、  
音として感じ取ることができません。

でもね、耳では聞こえなくても、身体で空気の震えとして感じることは  
充分にありうることなのですよ。

先生、わたし、先生のある演奏を聞いて、ひどく感動したのを覚えています。

お寺の隣にある、小さな木造のホールでしたけれども、

その綺麗なメロディが優しく響いて、ずっとその余韻が、身体に残っていました。

……そうでしたか。あなたの心に届きましたか……

……あの寺の隣にあるホールでね……そうでしたか……

先生？

先生……律子さん。恋をしたことがありますか。

先生……律子さん。恋をしたことがありますか。

先生……律子さん。恋をしたことがありますか。

僕はありません。

そのひとで、頭の中も、耳の中も、身体の中もいっばいではち切れそうになって  
大変に苦しいのです。

ですが、そのひとでいっばいになっているとき、

僕は生まれて初めて曲を産み出せました。

律子 ……先生、私も、今あるひとの

ことで、身体の中がはち切れそうに、痛いのです。

若い女性（ユミ）が、部屋に入ってくる。

ユミ 私は律子さんが好きです。

律子 え？ああ、ありがとう

ユミ 律子さん。そういう意味じゃありません。

律子 え？

ユミ、律子に突如口づける。

律子 （ユミからとっさに離れ）あなた、なんてこと

ユミ 本気ですよ。

律子 冗談おつしやい。おばさんをからかうのみたいがい……

ユミ 冗談なんかでこんなことしませんし、できません。

間。

律子 あのね、私はユミちゃんずっと年上で、下手したらお母さんと同い年、

とまではいかないけどそれに近いものもあるかもしれない、

それに、私はあなたの先生で……

そんなことどうだっていいです。関係ない。

律子 どうしたいの、あなたは……？

仮に私のことが本当に好きだとして、

ユミ 律子さん。私ね、人の喋り声、嫌いなんです。

なんでかっつていうと、私、親にね、ずっと罵られて育ったんですよ。父と母が仲良くなかったのもあるけれど、私も成績が悪かったし、のろまだし、イライラさせてたんでしょうね。

だから怒鳴られるなんてしょっちゅうでしたよ。

でもね、人間って不思議で、怒鳴られるのも毎日だと、慣れて、そのうち何も感じなくなるんです。

ただね、限界、つてあるみたいで、

私ある日、駅のホームで誰かが怒鳴られてるの聞いたたら、急に体がガタガタ震えだして、叫び声あげて倒れちゃったんですよ。

・・・どうかしてますよね。

その日から、人の声、ことば、を受け付けなくなってしまった。

すべて騒音に聞こえて、うるさくてうるさくて、気が狂いそうだった・・・。

ユミちゃん、

でもね、先生、そんな、ふさぎ込んでいた私でも、

「おと」ならゆるせたんです。

どういうこと・・・？

律子 ユミ それまではね、私、海外のロックとかアップテンポのJPOPとか、

好んで聞いてましたけど、それすらもうるさくなってしまう。

そんなときに、どこからかピアノの優しい音色が、聞こえてきたんです・・・。

・・・。

不思議でした・・・。ささくれだった神経を包み込むように、

すーっと音が私の中に入ってきて。

なんだろう、こう言っちゃうと大げさだけど、

ああ、私、生きててもいいんだな・・・、つて・・・

そう思えるようになったんです。

そうなの・・・そんなことが・・・でも、だから、じゃあ、ピアノを・・・？

まあ、一つのきっかけに過ぎませんですけど

・・・そう・・・

律子 ユミ 律子

沈黙。

ユミ ごめんなさい、急に変なこと話しちゃって。

律子 いえ、いいのよ。少しも変なことなんかじゃあないわ。

ユミ 律子さん

律子 え？

ユミ 律子さんのピアノの音色、そのとき聴いた優しい音色にそっくりなんです。

ああ、もうこれは運命だなんて・・・

初めて律子さんの演奏する曲を聞いて、そう思いました

ユミ そんな、冗談止して・・・

律子 律子さん。私、一応口説いてるんですけど。

ユミ え？じゃあその音色の話は作り話・・・

ユミ それは、律子さんが私に返事をくれたら、教えてあげます。

ユミ、 部屋を出ていこうとする。

律子、 突如「エリーゼのために」を弾きます。

ユミ、 立ち止まって律子の方を振り返る。

ユミ いいですよ、この曲

律子 練習曲としてはちようどいいわね



ユミが律子の前に現れる。

ユミ

「会いたい。会えない。好き。大好き。愛してる。ずっと一緒にいたい。キスして。ずっと一緒にいよう。あなた。あなた。あなた。ずっと。ずっと。ずっと。」

律子

あなたに抱かれてる気分になるの  
あたしったら、急に弱虫になっちゃって。ガラでもない。  
でも、今日くらい。音に甘えさせてよ

※くマークはスタッカートする（一音ずつ短く切って発音する）

ユミ

「あくいくたくいく。だくいくすくき。  
ずくつくとくいくつくしよくつにくいくたくいく。キくスくしくてく。  
あくなくたく。あくなくたく。あくなくたく。」

律子

「あくいくたくいく。だくいくすくき。  
ずくつくとくいくつくしよくつにくいくたくいく。キくスくしくてく。  
あくなくたく。あくなくたく。あくなくたく。」

徐々に律子は息切れして過呼吸気味になっていく。

先生

律子さん、もっと素直に声を出してごらん。

律子

先生、わからないんです、わたし、あの、もう一度お手本を・

先生

あなたの思うようにやってみたらいい。

ユミ

律子さん、

律子

えっ、ええ

ユミ

あと1曲、お願いできませんか

律子

わたし、時間が

ユミ

（行く手を遮り）どうせ何も予定ないくせに。いじわる。

律子

ユミちゃんやめて。

ユミ

いいでしょう？

律子

ね もうやめよう、やめようよ

ユミ

私どうかしてたの。

先生

そんなのひどいよ。あたし、本気なんだから。

先生

あんなことになったのは、私の、気の迷いで・・・

ユミ

わたし、本当にどうかして・・・

律子

律子さん、ねえ、

ユミ

ふる え てる

律子

・・・わたし、さびしいの

ユミ

おんなじだよ。私も。

先生

他に理由なんている？

律子

リっちゃん。またピッチがズレてきているよ

ユミ

あたしをあなたでいっぱいにして

先生

なに考えてるの？

律子

（声を詰まらせて）・・・ちよっと、休憩を

先生

あなただけの時間じゃないんですよ

ユミ

はやくしてよ

律子

待って

ユミ だーいすき。だいすき。だいすき律子さん。  
知ってる

律子 やめだやめだ、律子さんもうぐちやぐちやだ。聴いてられないよとても。  
先生 こんな聴かせないでくれよ頼むから。

ユミ 律子先生。

律子 こんなときに先生呼びわり。やめて。

ユミ 欲張りユミちゃん ただの好奇心かそうじゃないくらい分かるよ  
だってユミちゃん 私の胸に顔をうずめて ずっと泣いてたものね

ユミ 私はどうしたかったの

律子 私に聞いて、私に聞いて、私に聞いて・・・

似てるって、言ってたよね。あたしあなたのお母さん。

律子 代わりになんてなれっこないのに、ずるいよユミちゃん。

ユミ お願いだから、何か喋ってて

律子 何かって、なに

ユミ なんでもいいの。声が聞きたいの。

律子 あ、あ、あ、あ、

ユミ 言葉がいいの。

律子 言葉、嫌いだって言ってたくせに。

ユミ 律子さんならいいの。律子さんの声なら。

律子 あなたに寄り添うことしかできないの。わたし。

ユミ それで慰めになるのなら。

先生 慰めて。

ユミ |の発音は、唇を尖らすようにして、

そう、その調子 何回かやってみましょう

律子さん ずれてますよ テンポ

一人だけ先に行き過ぎないで あなたの悪い癖だ

すぐに走って行ってしまふ

ユミ もっと聞いて。ほら、

律子さん。ごめん、ごめんね。

ユミ なんかも鳴ってるよ

律子 なんかも鳴ってない

ユミ 鳴ってるってば、早く出てよ 電話 きつと ユミちゃんに

ユミ 私にかけてくるひとなんていない

ユミ もしもし。ユミちゃんですか。

ユミ ゆ・う・み・い・ち・や・あ・ん

さつきから頭の中で綺麗なメロディが聴こえてくるの・・・

あなたの声、はにかんだ顔、唇、その唇はなんて言っているの、思い出

せない、思い出せない、周りの音がうるさすぎるの、ああっ！

ぐあんぐあん地響きがるわ・・・うるさいうるさいうるさい！

私が聴きたいのはこんなキチガイじみた騒音じゃない、

ねえ、あなたも同じ音が聞こえていたの？

ユミ こんな耐えられないわ・・・！あつちからもこつちからも、

体中に金切り声が響いて・・・（律子、「あつ」と叫んでその場に倒れる）

先生 倒れている律子を揺り動かし、無理やり立たせて、

先生 律子ちゃん。どうやら君は基本のリズムを忘れてるね。

あんなに教えたじゃないか。でも、まあいい。

忘れたんなら、また教えてあげます。ほらほら、ちゃんと聞いて。

先生、英語のてあそび歌を歌い始める。  
(これは、口にした部位を順番に自分で触りながら歌う、リズムのあそび歌である)

先生 ♪Head, shoulders, knees and toes. knees and toes.  
Head, shoulders, knees and toes.  
And Eyes and ears and mouth and nose.  
Head, shoulders, knees and toes.

なあー

律子、おずおずとやります。

律子 ♪Head, shoulders, knees and toes. knees and toes.

先生 律子さん、全然なっていない！なっていないよ！もっと大きな声で！

先生、手遊び歌に合わせて、律子の手を歌っている部位へと導いていく。

律子 (ちひさきより滑らかに)  
♪Head, shoulders, knees and toes. knees and toes.  
Head, shoulders, knees and toes.  
And Eyes and ears and mouth and nose.  
Head, shoulders, knees and toes.

先生、メトロノームを遅いテンポへと変える。

先生 ほら、もっとちゃんと聞ごうー

先生・律子 ♪Head, shoulders, knees and toes. knees and toes.  
Head, shoulders, knees and toes.  
And Eyes and ears and mouth and nose.  
Head, shoulders, knees and toes.

そこへ、ユミが日本語で割り込んでくる。  
ユミは、その部位を歌いながら律子に触れていく。

ユミ  
♪あたま かた ひざ あし と て あたま かた ひざ あし と て  
ラララ め はな くち ほっぺ と みみ  
あたま かた ひざ あし と て

先生がそれに覆いかぶさるように英語を被せる。  
ユミは日本語でさらに覆い被せるように歌う。

律子、混乱し、リズムが分からなくなり、ふらついて、  
メトロノームを止め、床に投げつける。  
先生とユミの声が止む。

沈黙。間。



律子、手遊び歌をサイレント（口に出さずに）自分のリズムで、自分に触れていく。

（♪あたま かた ひぎ あし と て あたま かた ひぎ あし と て  
ラララ め はな くち ほっぺ と みみ  
あたま かた ひぎ あし と て）

律子、ふらふらとユミの前行き、存在を確かめるようにユミの身体に触れていく。手遊び歌をサイレント（口に出さずに）自分のリズムで、自分に触れていく。

（♪あたま かた ひぎ あし と て あたま かた ひぎ あし と て  
ラララ め はな くち ほっぺ と みみ  
あたま かた ひぎ あし と て）

律子だんだん、ハミング（くちぶえ）をつけだす。だんだんリズムにのってきて、めちやくちやに手拍子をたたきながら踊る。身体に呼応するように大きくなるハミング。

律子 ♪タツラ タツタ タツウルツタ（口ずさみながらピアノをひく格好をする）

律子 ♪ジャジャジャー ジャツジャジャー  
ふんふんふんふん たつらつたらー

ユミ せんせ、せんせ、せんせ、せんせつ、  
あなたのおとが、私の血の中に染みわたるの。  
とっても気持ちいの。

先生 律子さん。これはいつたい、誰の為に弾いているんですか？  
（先生の言葉を振り切るように）ユミちゃん聞いてくれる？  
この曲を、あなたに捧げます、だなんて、  
あたしおかしいかしら・・・

ユミ 律子さん。わたし、待ってるわ。待ってるから。  
律子 ユミ。きつと、聴いていてね。

律子は、身体の中に走る感情を音にのせ、声にのせ、ピアノを演奏しながら、時折愛の言葉を口ずさみ、律子自身が生み出した曲を演奏する。時折涙ぐみながら、しかし演奏の手は緩めずに、素直に表現する。まるで、律子の魂の叫びのような演奏。

部屋の電気が落ちる。  
律子の身体がどさり、と崩れ落ちる音。  
数秒の沈黙ののち、部屋の扉をコンコンとノックする音。  
律子、ドアをおそるおそる開け、

律子 え？どうして・・・  
声 きこえたんです、あなたが。

——This song goes out to you&me.1)の曲をユミに捧ぐ——

幕